

ふたご文芸

短歌（蘭越短歌会から）

秋風にわら焼く煙たなびきて
はさ掛けし頃なつかしく想ふ
小森 チナ

施設へと移りし主居ぬ家の
花木いじらしつぎつぎと咲き
西條 美登
下田 文字

訪ね来し故郷の友と字び舎を
語りてやすらぐ吉園公園
高見 清恵

強風止みて山鳩すずめ黍畑に
おりて啄む村雨の中
おりて啄む村雨の中

山染むる紅葉の便り南への
花の便りに返す文かも
田中 昇

あの山も流れる川も変りなし
全てをつつむ我がふる里よ
中屋 吉恵

晴れの日と待ちて薯堀り機の音を
聞きつつ我は南瓜煮ており
日比野フク子
宮内誠子

心地良き瀬音を秋の陽の中に
釣りする夫を見続けて居り
西岡 孝一

夜長論やらせに怖い脱日本
童心の手となり栗を拾いけり
石坂 寿鳳

軒下にまでも届くや虫の声
霜の朝刈田にぼつり栗山子かな
藤原 孝義

静かさよ影あつめたり冬囲い
土方よしの
田中 昇

神無月ほとけの加護にすがりたし
変りなき今日という日や焼秋刀魚
上野 朝子
小川 澄江

雪虫の透ける命を掬いけり
選者吟
石坂 寿鳳

◆ホットひと休み◆

～ ねざらい ～



編集室

今年も、カメムシや雪虫が例年より多い年でした。この雪虫、初雪が近づいてきたことを伝えると言われて、ロマンチックな一面もあります。図鑑をめくると、「アブラムシ」の仲間、晩秋に羽が生え、トドマツの木からヤチダモの木に移動する時に、体に「ロウ」物質を身にまとい、漂うように飛ぶ姿が雪を連想させるため、雪虫と呼ばれるようです。体に付かない方法は、「ゆつくりと歩く」、服に付いたら、息を吹きかけることが一番だそうです。(ま)

先日、ある小学校の学芸会の取材に行つて来ました。開会のことばの途中で会場に來られた方へのインタビューがあつたり、全校児童による詩の朗読や楽器演奏、落語も披露されたりと、とても趣向を凝らしたプログラムとなっていました。その他に先生とPTAの皆さんによる歌も披露されとても和やかで、心温まる学芸会でした。(た)